

悲しみの人 イエス

主の苦しみと共感が私たちにもたらすもの



ビル・クラウダー著



はじめに 悲しみの人イエス

主の苦しみと共に
私たちにもたらすもの

あ

のヒーローが再びスクリーンに帰ってきました。2013年、クリストファー・ノーラン監督による『スーパーマン』のリブート版、『マン・オブ・スティール（直訳：鋼の人）』が封切られたのです。

公開に先立つインタビューで、ヒロインのロイス・レインを演じたエイミー・アダムスが示唆に富

む発言をしています。スーパーマンの物語が世代を超えて人気なのは、誰の心にも本質的な憧れがあるからだと言うのです。「私たちを自分自身から救い出してくれる人がどこかにいる、そう信じたくない人なんているのでしょうか」

核心を突いた問いです。窮地のとき、私たちは誰かの助けを求めます。「鋼の人」スーパーマンが来てくれればいいのに、と思います。しかし、聖書が告げるのは、それとは異なる筋書きです。来るべきメシヤ、贖（あがな）い主、救い主について、イザヤはこう預言しました。

彼は蔑（さげす）まれ、人々からだけ者にされ、悲しみの人で、病を知っていた。

人が顔を背けるほど蔑まれ、
私たちも彼を尊ばなかつた。

まことに、彼は私たちの病を負い、
私たちの痛みを担つた。

それなのに、私たちは思った。

神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。

（イザヤ書53:3-4 強調は筆者による）

「鋼の人」とは似ても似つきません。この世の常識とは真逆に、王は「鋼の人」ではなく「悲しみ

の人」として来られるというのです。この預言でイザヤが伝えようとしていることを端的にまとめれば、次のようになるでしょう。

イエスは私たちの罪と咎（とが）だけでなく、私たちの痛みや悲しみをも担われた。

本書は、ここから二つの大切な問い合わせ取り上げます。一つ目は、「悲しみの人」イエスが人として歩む中で、どのような痛みや苦しみを経験されたのか、ということです。前半はイエスの直面された苦悩に注目します。イザヤの預言の通り、イエスが正真正銘「悲しみの人で、病を知っていた」ということを福音書から見ていきましょう。

一方、「悲しみの人」イエスの個人的な経験は、現代を生きる私たちの様々な苦悩とどう関わるのでしょうか。これが二つ目の問い合わせです。イエスの苦しみは、十字架と復活による救いの恵みに加え、何かを私たちにもたらしたのでしょうか。後半ではヘブル人への手紙を手掛かりに、この点を考えます。

もちろん、「悲しみの人」は私たちの罪と咎を担うために来てくださいました。しかしそれだけではなく、私たちの悲しみと痛みをも担ってくださいました。キリストが地上で経験された暗闇をつぶさに見ることで、イエスがあわれみ深く信頼に足る大祭

司だと理解できるでしょう。このお方がおられるから、私たちも人生の暗闇を歩んでいくことができるのです。

ビル・クラウダー

目次

第一章

イエスが経験された悲しみ 7

第二章

イエスの悲しみがもたらしたもの 21

編集: Tim Gustafson, J.R. Hudberg, Peggy Willison
表紙写真: Terry Bidgood

デザイン: Steve Gier

ページ画像: (p.1) Terry Bidgood ; (p.7) Titian, Public Domain; (p.21) Rembrandt van Rijn, Public Domain

聖書は特に記載のない場合は、聖書 新改訳2017 ©2017 新日本聖書刊行会を引用

翻訳:山田風音

編集:有澤優子

校正:ニコルス明子

発行所:有限会社デイリーブレッド

住所: 大阪市中央区玉造2-26-47大阪クリスチャンセンター内

Website: japanese-odb.org • Email: japan@odb.org

転載および転記には許可が必要です。冊子は非売品です。デイリーブレッドは特定の教会や教団ではなく読者のみなさまの献金によって支えられ、人生を変える聖書の英知を伝えています。この冊子は、正統なキリスト教の教理に基づいて書かれたものです。エホバの証人、末日聖徒イエス・キリスト教会(モルモン教)、世界平和統一家庭連合(統一教会)、全能神教会とは関係ありません。

Copyright © 2023 Our Daily Bread Ministries, Grand Rapids, MI
All rights reserved.



第一章 イエスが経験された悲しみ

「案

するより産むが易し」ということわざがありますが、要は人生理屈ではないということです。実体験に勝るものはありません。例えばオリンピック初出場のアスリート。マスコミに囲まれ、自分のことが四六時中報道されるような事態に戸惑うことでしょう。また、全国民の期待を一身に背負って戦うプレッシャーも、実際に経験しなければ分からぬでしょう。一方、これまでに出場したことのある選手は「経験があるから有利だ」と公言します。人生は理屈ではなく経験なのです。

驚くべきことに、同じことが人となられたイエスにも言えます。肉体をまとってこの世に来られたのは単なる見物人としてではありません。キリストは人としての人生を十分に、そして完全に生き抜いてくださいました。単にこの痛みに満ちた世界を観察するためではなく、実際に経験するために来られ、人生の最も困難な状況さえ味わってくださったのです。

【拒絶される悲しみ】

誰もが多かれ少なかれ拒絶を経験します。人間関係がこじれてしまった、仕事を突然クビになった、スポーツの試合で補欠になった、テレビの人気オーディション番組で落選した……。程度の差こそあれ、似たような経験は日常生活にたくさんあるはずです。

拒絶されると心が痛むのはなぜか。それは「あなたは求められていない、評価されていない、必要ない」というメッセージを言外に(時にはつきりと)受け取り、「自分なんかダメだ、価値が無いんだ」と信じ込んでしまうからです。しかし、もっと大切な問い合わせがあります。歴史上で最も完全で価値あるお方は、どのように拒絶を経験されたのか。その事実は、傷つきやすい私たちに何を教えるのか。ルカの福音書13章でイエスは拒絶を経験されますが、そこには2つの側面がありました。

ちょうどそのとき、パリサイ人たちが何人か近寄って来て、イエスに言った。「ここから立ち去りなさい。ヘロデがあ

なたを殺そうとしています。」イエスは彼らに言われた。
「行って、あの狐（きつね）にこう言いなさい。『見なさい。わたしは今日と明日、悪霊どもを追い出し、癒やしを行い、三日目に働きを完了する。しかし、わたしは今日も明日も、その次の日も進んで行かなければならない。預言者がエルサレム以外のところで死ぬことはあり得ないのだ。』
エルサレム、エルサレム。預言者たちを殺し、自分に遣わされた人たちを石で打つ者よ。わたしは何度、めんどりがひなを翼の下に集めるように、おまえの子らを集めようとしたことか。それなのに、おまえたちはそれを望まなかつた。見よ、おまえたちの家は見捨てられる。わたしはおまえたちに言う。おまえたちが『祝福あれ、主の御名によって来られる方に』と言う時が来るまで、決しておまえたちがわたしを見ることはない」（ルカ13:31-35）

イエスはエルサレムに拒絶されますが、まず注目すべきは、その発端が小さな、個人的な拒絶だったことです。ここに登場するヘロデはローマ帝国の支配下だったユダヤ地方の領主で、マタイの福音書2章で赤子イエスを殺そうとしたヘロデ大王の息子、ヘロデ・アンティパスです。ルカの福音書には、後にイエスが捕らえられた際、彼がイエスの行う何らかの奇跡を見たがったとあります（23:6-12）。しかし、ここではイエスを恐れ、殺そうとしています。なぜでしょう。理由は9章7節-9節にあります。彼はイエスを、死人の中からよみがえった

バプテスマのヨハネだと考えたのです。そしてヨハネを殺したように、イエスをも殺そうとしています。これは度を超した拒絶と言う他ありません。

また意外なことに、イエスにこの差し迫る危険を知らせたのは、普段敵対していたパリサイ人でした。どうしてでしょう。▶ある注解書は次のような可能性を指摘します。

「パリサイ人たちとはなぜイエスを守ろうとしたのか。この状況を、イエスを追い払う口実に使ったと考えるのが妥当だろう。イエスはご自身の目的地がエルサレムだと公言し、着々と歩みを進めておられた。従ってパリサイ人たちの意図は明確である。彼らはイエスが恐れをなして使命を断念するよう仕向けたのだ」(The Bible Knowledge Commentary)

▶一方で次のように考えることもできる。パリサイ人がイエスを守ろうとしたのは、その中にイエスへの迫害を望まない者が何人かいたからかもしれない。ニコデモは、イエスの公生涯の初期からキリストへの信仰の歩みを始めていた。後にガマリエルは、知恵によって他の議員たちを説得し、使徒たちの命を守った(使徒 5:33-39)。また、アリマタヤのヨセフは(必ずしもパリサイ人ではないが)「有力な議員」で、イエスへの信仰を表明した。

しかしルカの福音書13章で注目すべきは、イエスはエルサレムを目指しながらも、そのエルサレムがご自身を拒絶したと存じだったことです。後に輝かしいエルサレム入城を果たされるにも

かかわらず、ここでは、めんどりがひなを集めるように、何度も彼らを集めようとしたが、彼らはそれを拒んだと嘆いておられます（34節）。聖書教師ウォレン・ウィアズビーは次のように書いています。

悔い改めて救われる機会を何度も与えられたのに、人々はイエスの呼びかけに心を留めなかつた。「おまえたちの家」とは、ヤコブの子孫（イスラエルの家）と神殿（神の家）の両方を指す。イエスはどちらも「見捨てられる」と語られたが、事実、街も神殿も破壊され、人々は散らされた。

エルサレムはイエスを拒んだことで、自らの上に大きな苦難を招きました。誤解しないでください。イエスは彼らの拒絶に深く傷つき、心を痛められたのです。その悲嘆の深さが、この箇所にはっきりと表れています。

【死別の悲しみ】

私が初めて死を身近に経験したのは、大学時代の親友マックが突然亡くなった時でした。大きな事故で、ガールフレンドのシャロンと共に命を落としました。私の抱いた喪失感は深く激しいものでした。4年後に父を亡くすと、喪失感はさらに大きくなりました。死別は胸がつぶれるような悲しみをもたらします。イエスもそれを経験されました。ヨハネの福音書には主が親しい友ラザロを亡くされた時のことが書かれています。

イエスが愛する人の死に直面されるのは初めてではないはずです。この時までに、すでに地上の養父、ナザレの大工ヨセフを亡くされていたと思われます。しかしヨハネの福音書11章は四福音書の中で、個人的な死別と喪失に直面されるイエスの姿を伝える代表的な箇所です。

■ **ヨセフ**は福音書にほとんど登場しませんが、イエスの人生に何の影響も与えなかったわけではありません。イエスは幼少期からご自身が救いをもたらすために来た神の子だとご存じでしたが、だからといって地上の父ヨセフと何のつながりもなかったと結論するのは浅はかです。彼の死はイエスの心に大きな影響を与えたことでしょう。

ラザロの姉妹たちはイエスに使いを送り、彼が危篤だと伝えました。しかし主はすぐには応じられませんでした。ご自身が後になさることを知っておられたからです。

これを聞いて、イエスは言わされた。「この病気は死で終わるものではなく、神の栄光のためのものです。それによって神の子が栄光を受けることになります」(ヨハネ11:4)

また続いてこうあります。

イエスはこのように話し、それから弟子たちに言われた。
「わたしたちの友ラザロは眠ってしまいました。わたしは彼を起こしに行きます。」弟子たちはイエスに言った。「主よ。眠っているのなら、助かるでしょう。」イエスは、ラザロ

の死のことを言われたのだが、彼らは睡眠の意味での眠りを言われたものと思ったのである。そこで、イエスは弟子たちに、今度ははっきりと言わされた。「ラザロは死にました」（ヨハネ11:11-14）

イエスはご自身がこれからなさることを知っておられました。その点に疑いの余地はありません。それでもラザロの墓の前に立ち、悲嘆に暮れる姉妹マルタとマリア、また嘆き悲しむ村人たちを見て、心を痛められたのです。友の死をどれほど激しく悲しまれたかをよく読み取ってください。

イエスは、彼女が泣き、一緒に来たユダヤ人たちも泣いているのをご覧になった。そして、**靈に憤りを覚え、心を騒がせて**、「彼をどこに置きましたか」と言わされた。彼らはイエスに「主よ、来てご覧ください」と言った。**イエスは涙を流された**。ユダヤ人たちは言った。「ご覧なさい。どんなにラザロを愛しておられたことか。」しかし、彼らのうちのある者たちは、「見えない人の目を開けたこの方も、ラザロが死なないようにはすることはできなかつたのか」と言った。イエスは再び**心のうちに憤りを覚えながら**、墓に来られた。墓は洞穴で、石が置かれてふさがっていた。（ヨハネ11:33-38 強調は筆者による）

ヨハネは強い言葉を連ねてイエスの悲しみを描写しています。救い主なるお方が「心を騒がせて」「涙を流された」と述べ

るにとどまらず、親しい友の死に「憤りを覚えた」とさえ書いています。

■ これは怒りや義憤、あるいは激怒さえ表現する語である。このような激しい感情を引き起こしたのは何なのか。それは死とそれに伴う悲しみをもたらす罪への義憤だと理解する者もいる。……あるいは、ご自身の苦しみの杯が近いことを知り、人間の苦悩の重さを実感されたからだともいえる。(The New Bible Comentary)

ご自身が神の御力でラザロを復活させるとご存じでしたが、それでもイエスはその死を嘆き悲しました。それも強い憤りを伴って、です。この重要な点を見逃してはなりません。死と戦うために来られたイエスは今、その敵が人間に及ぼす力と影響の大きさを直視し、嘆き悲しまれたのです。イエスが来られたのは、この死を滅ぼすためでした。後にパウロが述べたとおりです。「最後の敵として滅ぼされるのは、死です」(1コリント15:26)。死はささいな問題ではありません。神にとってさえそうです。詩篇116篇15節はこう語ります。

主の聖徒たちの死は　主の目に尊い。

事実、神は悪者の死にさえ心を動かされるお方です。預言者エゼキエルはこう告げています。

わたしは悪しき者の死を喜ぶだろうか——神である主のことば——。彼がその生き方から立ち返って生きることを喜ばないだろうか。(エゼキエル書18:23)

わたしは生きている——神である主のことば——。わたしは決して悪しき者の死を喜ばない。悪しき者がその道から立ち返り、生きることを喜ぶ。立ち返れ。悪の道から立ち返れ。イスラエルの家よ、なぜ、あなたがたは死のうとするのか。(33:11)

【ゲツセマネの悲しみ】

初めて引率したイスラエル聖書旅行は、息をのむような素晴らしいものでした。初日はカルメル山のホテルに泊まり、その後メギドやガリラヤ湖など聖書に登場する場所、またマサダやホロコースト記念館など歴史的に重要な場所を巡りました。学びの多い、盛りだくさんの旅でした。

しかし、他のどんな名所よりも「聖地」と呼ぶにふさわしいと思う場所がありました。それはゲツセマネの園、イエスの受難が始まった所です。そこでイエスの苦しみを思い巡らし祈る時間は、まさに聖地での厳粛な体験でした。マタイとマルコは園でのイエスの経験を、同じような言葉で記しています。

そのとき、イエスは彼らに言われた。「**わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。**ここにいて、わたしと一緒に目を覚まし

ていなさい。」それからイエスは少し進んで行って、ひれ伏して祈られた。「わが父よ、できることなら、この杯をわたしから過ぎ去させてください。しかし、わたしが望むようにではなく、あなたが望まれるままに、なさってください」（マタイ26:38-39 強調は筆者による）

さて、彼らはゲツセマネという場所に来た。イエスは弟子たちに言われた。「わたしが祈っている間、ここに座っていないさい。」そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネと一緒に連れて行かれた。イエスは深く悩み、もだえ始め、彼らに言われた。
「わたしは悲しみのあまり死ぬほどです。ここにいて、目を覚ましていなさい」（マルコ14:32-34 強調は筆者による）

ここに、十字架を目前にしたイエスの苦悩を見ることがあります。恐怖とも言えるような苦悩です。それ以前にも2度、イエスはその苦悩を表しておられました。1度目は神殿で異邦人たちが、イエスに一目会いたいと願った時です。御父のご計画の壮大さを示すかのように、イエスはこう答えられました。

今わたしの心は騒いでいる。何と言おうか。「父よ、この時からわたしをお救いください」と言おうか。いや、このためにこそ、わたしはこの時に至ったのだ。（ヨハネ12:27 強調は筆者による）

2度目は、最後の晚餐（ばんさん）の席でユダの裏切りについて語られた時です。

イエスは、これらのことと話をされたとき、心が騒いだ。そして証しされた。「まことに、まことに、あなたがたに言います。あなたがたのうちの一人が、わたしを裏ります」
(ヨハネ13:21 強調は筆者による)

2回ともヨハネは「心が騒ぐ」という言葉でイエスの様子を描写しています。これは興奮して落ち着かない、悩み苦しんでいる、感情がかき立てられる、不安でしょうがないといった様子を表します。御父の目的を成就するために来られた神の御子にもかかわらず、ご自身を待ち受ける苦難を思う時、イエスの心は苦悩でいっぱいになりました。

これら2度の悲しみはゲツセマネへの序章でした。ゲツセマネでイエスは、ご自身を確かに待ち受ける十字架上の現実を直視し、葛藤されました。心騒ぐだけにとどまらず、「深く悩み」「もだえ」苦しまれました。とうとうこの園で、抑えきれなくなつた苦悩があふれ出したのです。

来るべき受難への重圧は今や最高潮に達し、イエスを押しつぶそうとしていました。ゲツセマネはオリーブ油の産地でしたが、大きな石の重みでオリーブの実が碎ける、その様子はまさにイエスが「この責任から解いてほしい」と必死に祈られた姿に重なります。その苦悩の激しさは「この杯を

取り去ってください」と3度も祈られるほどでした。しかしそれでも、イエスは父のみこころに従われました。私たちのためにご自身をささげ、そして、十字架の上で私たちの悲しみをその身に負ってくださいました。

さあ、十字架に進みましょう。

▣ **ゲツセマネ**はオリーブ山のふもとにある。オリーブの木が多く、その地名はアラム語で「油搾り」という意味。

【十字架上の悲しみ】

それまでも分かっていたはずの十字架の意味が、思いもよらず突然、心に迫ってきたという経験はないでしょうか。1978年、ナッシュビルのスタジオで、私が所属していた大学生バンドのアルバムを制作していた時のことです。レコーディングエンジニアのトラヴィス・タークが「君に聞かせたい未発表音源がある」と言うと、照明を落とし、私一人をスタジオに残して出てきました。流れてきたのはフィル・ジョンソンの歌う"The Day He Wore My Crown"という美しいバラードでした。「本当は私のかぶるべきいばらの冠をかぶり、イエスは十字架でご自身をささげてくださった」という歌詞に心を打たれ、時が止まったかのように感じました。

十字架上で「悲しみの人」が何を経験してくださったのかを見ていきましょう。

さて、十二時から午後三時まで闇が全地をおおった。三時

ごろ、イエスは大声で叫ばれた。「エリ、エリ、レマ、サバクタニ。」これは、「わが神、わが神、どうしてわたしをお見捨てになつたのですか」という意味である。(マタイ27:45-46
強調は筆者による)

これは本書の冒頭に引用した、苦しむ救い主についてのイザヤの預言を思い起こさせます。

彼は蔑まれ、人々からだけ者にされ、

悲しみの人で、病を知っていた。

人が顔を背けるほど蔑まれ、

私たちも彼を尊ばなかつた。

まことに、彼は私たちの病を負い、

私たちの痛みを担つた。

それなのに、私たちは思った。

神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。

(イザヤ書53:3-4 強調は筆者による)

イザヤが記した痛みそのままを、イエスは十字架上で余すところなく、最期までその身に受けてくださいました。その苦しみは、詩篇22篇のダビデの嘆きに託されました。「神はなぜ、私を見捨てられたのか」という叫びが、真っ暗なカルバリの丘に響き渡つたのです。しかし、驚くべきことに、この悲しみが最終的にはイエスに喜びをもたらしました。

信仰の創始者であり完成者であるイエスから、目を離さな

いでいなさい。この方は、ご自分の前に置かれた喜びのために、辱めをものともせずに十字架を忍び、神の御座の右に着座されたのです。（ヘブル12:2 強調は筆者による）

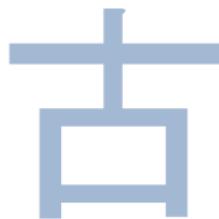
イエスは私たちの悲しみと痛みを担ってくださつただけでなく、十字架の犠牲によって私たちへの愛を表し尽くしてくださいました。十字架の上で、私たちの悲しみや痛みだけでなく、そのような重荷をもたらす罪と過ちをも担ってくださいました。十字架はこの壊れた世界のすみずみにまで及ぶイエスの勝利ですが、そこには叫ばざるを得ないほどの苦しみが伴いました。

苦しみの叫びは、究極の勝利の叫びに変わります。「完了した」（ヨハネ19:30）これがイエスの勝利宣言です。私たちと同じように痛みや悲しみを経験されたイエスは、私たちの数々の痛みや悲しみをその身に引き受け、それに打ち勝つてくださいました。



第二章

イエスの悲しみがもたらしたもの



イラテン語のことわざに「経験は最良の教師」というのがありますが、その例は生活のあちこちにあります。科学者は実験と考察を積み重ねることで、よりよい理論を立てます。アスリートやミュージシャンは練習を積み重ねることで能力を高め、技術を磨きます。夫婦は長い歩みの中で多くの困難に共に立ち向かい、絆を深めます。事実、経験は人生の貴重な導き手です。

経験から学び、人間関係を深める。これは誰もが体験的に知っている、当たり前のことです。しかし、神の子イエスも経験から学ばなければならなかつたと聞いたらどうでしょうか。

驚きや違和感を覚えるかも知れません。それでもヘブル人への手紙は、イエスが私たちと同じように経験から学ばれたと教えています。

迫害下のクリスチャンにあてたこの手紙は、キリストの優位性、つまりキリストが全てのものにまさるお方だと論ずるために紙幅の多くを費やしています。しかしそれだけではありません。イエスが悲しみの人として経験された苦しみと、それを通して成し遂げてくださったことについて、3つの大切なことを教えています。（先述のように、それは十字架と復活による救いに留まらないのです。）それでは、イエスは何を学ばれたのでしょうか。

イエスは従順を学ばれた

キリストは御子であられるのに、お受けになった様々な苦しみによって従順を学び、（ヘブル5:8）

興味深いことに、ある注解書はここにギリシャ語の言葉遊びがあると指摘します（The Bible Knowledge Commentary）。「苦しみ【エパスエン】によって……学び【エマスエン】」と韻を踏むことで、「苦しみ」と「学び」の関連性を強調しているというのです。

これは単なる上手な言葉遊び以上のものです。ギリシャ語でこの手紙を聞いた当時の聴衆は、この語呂合わせによつて、著者が何か大切なことを強調していると気付いたはずで

す。それはキリストの経験と、その重要性についてのメッセージです。

また、ここには明らかな教義上の挑戦が含まれています。それは「ケノーシス」と呼ばれる、ピリピ人への手紙2章の内容と深くつながっています。パウロはそこで、キリストはこの地に来られるに際し、ご自分を「空しく」、あるいは「無に」されたと書いています（7節、原語「ケノー」は「ケノーシス」の語幹）。

ここに神学的な挑戦が凝縮されています。イエスがこの地に来られた時、一体何を空しくされたのでしょうか。神としての属性、御性質、特権、あるいは他の何かなのでしょうか。神学者たちが何世紀にもわたり議論を続けていますが、次の文章は特に有益です。

ここに神秘的な要素があることを否定する必要はない。……私たちには十分に理解できないが、初めから全てをご存じの完全な神の子が、自ら人となることで、人間であるということを身をもって理解してくださった。人間の本物の苦悩を味わわれたからこそ、主はご自身に従う者たちに心の底から共感してくださる。（The Bible Knowledge Commentary）

しかも、ヘブル人への手紙が「学び」と結び付ける「苦しみ」は、ありふれた普通のものではありません。直前の節を見

れば、「学び」と結び付けられている「苦しみ」は、先ほど見たあのゲツセマネでの苦悩です。

キリストは、肉体をもって生きている間、自分を死から救い出すことができる方に向かって、大きな叫び声と涙をもつて祈りと願いをささげ、その敬虔（けいけん）のゆえに聞き入れられました。（ヘブル5:7）

ある注解書はイエスのゲツセマネでの祈りと学びの関係性についてこう記しています。

神の子であるにもかかわらず、イエスは父のみこころからそれてしまいたいという誘惑を経験された。その先に苦しみが待ち構えていたからである。イエスは、この世を生きる生身の人間にとて、神への従順が実際どのようなものなのかを学ばなければならなかった。それは同じように誘惑にさらされる私たちを理解するためであり、また、徹底して自らを神にささげ従い抜く模範を私たちに示すためだった。（The New Bible Commentary）

苦しみの経験から学ばれたからこそ、イエスは苦しみの中にいる私たちに同情してくださいます。次はこの点について見ていきます。

イエスは私たちに同情してください

映画『アベンジャーズ／エンドゲーム』の舞台は、全宇宙の生命の半数が消し去られた世界です。生き残った人々はみ

な、喪失の悲しみを抱えながら生きています。鬱（うつ）で塞ぎ込む者、復讐（ふくしゅう）の機会を狙う者、仕事に没頭する者……。悲しみへの対処の仕方は様々です。しかし確かなのは、誰もが痛みの中で、葛藤しながら歩んでいるということです。その歩みは一人一人異なり、誰とも比較できません。

私たちの歩みも同じです。しかしその孤独に、悲しみの人イエスは触れてくださいます。自分の抱える問題は誰にも分かってもらえないと打ち沈むとき、ヘブル人への手紙は断言します。実に、神の御子は私たちに心から同情してください、と。

私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯しませんでしたが、すべての点において、私たちと同じように試みにあわれたのです。（ヘブル4:15）

キーワードはもちろん「同情」と「試み」です。これらはイエスの心の中で結びついています。まず後者「試み」から見てみましょう。原語は前向きに「試練」とも、否定的に「誘惑」とも訳せる言葉で、この文脈ではどちらにも解釈できます。

マタイの福音書4章で、イエスは確かにサタンの試みを受けられました。それも40日間の断食によって身体的に弱り果てた状態でです。しかし、それはイエスの経験された誘惑のほんの一部に過ぎません。ヘブル人への手紙がはっきりと告げるのは、イエスはその生涯全体を通じ「すべての点において、私たちと同じように試みにあわれた」ということです。私たちと異なるのは罪を犯されなかつたという点だけです。

「すべての点において」という言葉も極めて重要です。それはイエスの経験の包括性を表すからです。人となられたキリストは、私たちの直面しうるすべての試練や誘惑を余すところなく経験してくださいました。ですから「自分の苦悩など誰にも分かってもらえない」と感じるとき、思い出してください。イエスもあなたの歩んでいる試練の道を歩まれました。そのすべてを、あなたより先に経験してくださったのです——それも最期まで。私たちは試練の道からすぐにそれたり、その全貌が見える前に重圧に屈したりしてしまいます。しかしイエスはそんな私たちと違いました。試練を極みまで経験してくださったのです。

これが、もう一つのキーワード「同情」につながります。イエスはどうして私たちに同情できるのでしょうか。それは私たちと同じように誘惑を経験しながらも、最期まで屈することがなかったからです。ワイアズビーの述べる通りです。「大きすぎる試練も、強すぎる誘惑もない。イエス・キリストは必要なときに、必要ないつくしみと恵みとを私たちに与えてくださるのだ」

イエスが私たちに共感し必要な助けを与えてくださる、というのは口先だけのお題目ではありません。その助けは人の子として歩まれた神の子の生涯に裏付けられた、真実で、確実なものです。

イエスは私たちを助けることができる

1587年7月、子どもを含め117人のイギリス人が、後にアメリカのノースキャロライナ州となるロアノーク島に上陸しました。環境が厳しく、入植者たちは物資をすぐに使い果たしてしまいました。彼らに請われたジョン・ホワイト総督は、救援物資を手に入れるためにイギリスに戻りました。しかし、彼の必死の努力にもかかわらず帰還は遅れに遅れ、入植者たちの切望していた物資を迅速に届けることはできませんでした。3年後、総督が新世界へようやく戻った時、彼らはみな、こつぜんと姿を消していました。何が起こったのかは未だに分かっていません。今日までアメリカ史の謎とされています。どこへ彼らが消えたのかは今後もわからないでしょう。しかしなぜ彼らが姿を消したかは明らかです。生きるか死ぬかの切迫した状況で、助けが来なかつたからです。

彼らほど切迫した状況ではないとしても、私たちはみな「見捨てられた、助けを呼び求めて誰も応えてくれない」と感じる瞬間があるでしょう。しかし、たとえ他の誰も応えてくれなくても、悲しみの人イエスは私たちの呼びを聞いてくださいます。

イエスは、自ら試みを受けて苦しめたからこそ、試みられている者たちを助けることができるのです。(ヘブル2:18)

ある注解書は重要な点を指摘します。「イエスは私たちと

同じ性質をとり、人間のはかなさを経験し、試みに遭い苦悩してくださった。だからこそ、試みられている者に適切な助けを与えることができるのだ」(The New Bible Commentary)

イエスは、人間であるとはどういうことかを知っておられました。ヨハネの福音書4章には「旅の疲れ」を感じ、井戸の傍らに座って休まれるイエスの姿があります(6節)。サマリヤの強い日差しの下を歩けば当然、喉が渴きます。そこで、やって来た女性に飲み水を求められました(7節)。他の場面では、嵐に翻弄(ほんろう)される小舟の中でさえ、疲れ果てて眠つておられる姿もあります(マルコ4:36-38)。そして、十字架の上から「わたしは渴く」と言われました(ヨハネ19:28)。

そんなイエスは、私たちにとってどのような大祭司[■]なのでしょう。ヘブル人への手紙が示す2つの大切な点が、私たちを励ましてくれます(ヘブル2:17 参照)。

- ・あわれみ深い——イエスの助けは、私たちに対する非難からではなく、あわれみの心から生まれる。(ヨハネ3:17 参照)
- ・忠実——イエスは折りにかなった助けを与えてくださると信頼してよい。(ヘブル4:15-16 参照)

このようなイエスの姿勢は「助けることができる」と訳された言葉にありありと表わされています。「子どもの泣き声を聞き、とっさに駆け寄る様子」とも説明できる表現です。イエスは人となってくださったので、私たちを助ける準備は十分です。

▣ イエスはこの地上で、罪は犯されなかつたが「兄弟たちと同じように」人間としての弱さを経験された。自分で何もできない赤子であるとはどういうことか、また子どもが成長し、大人になっていくとはどういうことを実際に体験された。……すべては天で**大祭司**として務めるための「訓練」だった。(ウォレン・ウィアズビー)

ですから、試練に屈しても誘惑に陥っても、私たちには大祭司、あるいはヨハネの言う「とりなしてくださる方」がいます。

私の子どもたち。私がこれらのこと書き送るのは、あなたがたが罪を犯さないようになるためです。しかし、もしだれかが罪を犯したなら、私たちには、御父の前でとりなしてくださる方、義なるイエス・キリストがおられます。この方こそ、私たちの罪のための、いや、私たちの罪だけでなく、世全体の罪のための宥(なだ)めのささげ物です。(ヨハネ2:1-2)

まとめ

さて、イザヤがキリストとその贖いについて預言した言葉を今、私たちはさらに深く味わうことができます。

彼は蔑まれ、人々からのけ者にされ、
悲しみの人で、病を知っていた。

人が顔を背けるほど蔑まれ、
私たちも彼を尊ばなかつた。

まことに、彼は私たちの病を負い、
私たちの痛みを担った。
それなのに、私たちは思った。
神に罰せられ、打たれ、苦しめられたのだと。

(イザヤ書53:3-4)

イエスは悲しみの人でしたが、その悲しみは無意味ではありませんでした。ウィアズビーはこう述べます。「どのような試練に直面しても、イエス・キリストは私たちの必要を理解し、助けてくださる。イエスが私たちに同情し、私たちを強めてくださることをゆめゆめ疑うことはない。ただもう一つ、心に留めるべきことがある。神が私たちに困難の中を通される、その経験によって私たちは他者の必要をもっと理解し、励ませるようになる」

ウィアズビーが視点を少しずらしているのに気付かれましたか。イエスがご自身の苦しみの経験によって私たちを理解してくださるように、私たちもまた、苦しみを通することで、他者をさらに理解できるようになります。詩人ヘンリー・ワーズワース・ロングフェローはこう書いています。「たとえ敵であっても、一人一人の生い立ちや背景の中にある悲しみや困難をつぶさに見ることができたら、敵意などすっかり失せてしまうだろう」。コリント人への手紙第二1章3-7節でパウロは、苦難や挫折の中にある人々を慰めるよう呼びかけていますが、それは御子を通して私たちが神から受けた慰めによるのです。

私たちの主イエス・キリストの父である神、あわれみ深い父、あらゆる慰めに満ちた神がほめたたえられますように。神は、どのような苦しみのときにも、私たちを慰めてくださいます。それで私たちも、自分たちが神から受ける慰めによって、あらゆる苦しみの中にある人たちを慰めることができます。私たちにキリストの苦難があふれているように、キリストによつて私たちの慰めもあふれているからです。私たちが苦しみにあうとすれば、それはあなたがたの慰めと救いのためです。私たちが慰めを受けるとすれば、それもあなたがたの慰めのためです。その慰めは、私たちが受けているのと同じ苦難に耐え抜く力を、あなたがたに与えてくれます。私たちがあなたがたについて抱いている望みは揺るぎません。なぜなら、あなたがたが私たちと苦しみをともにしているように、慰めもともにしていることを、私たちは知っているからです。

すべての悲しみや苦しみを背負われた御子が慰めてくださるのであるですから、私たちにとって、もはや人生の暗闇は無意味ではありません。困難の中でも「悲しみの人」イエスに倣い、神の望まれる行動を選び取っていきましょう。また自らの暗闇の経験を通して他者の苦しみや悲しみに目を向け、共感しつつ、慰め主なるお方、「悲しみの人」イエスを伝えましょう。

ディリーブレッド社が発行する冊子およびコンテンツのご案内

「ディリーブレッド」



日々聖書に親しみ、神と交わるひとときの手助けをするデボーション誌。季刊冊



開く

子の定期送付、メール、ウェブサイト、アプリでお読みいただけます。詳しくはウェブサイトをご覧ください。

多言語対応アプリのダウンロード
はこちらから



電話でもお届けしています。

06-6622-1870



ポッドキャストはこちらから



Spotify



iTunes



Google Podcast

探求の書シリーズ

恵み 神の贈り物



Constantine R. Campbell

「探求の書シリーズ」

人生で直面するあらゆるテーマについて聖書がどう語っているかをともに考えます。



読む

自分らしく生きるシリーズ

「自分らしく生きるシリーズ」

自分らしさを発見して、育てていきませんか。そのヒントを聖書からお伝えします。

読む



自分らしく生きるシリーズ

脱・つながり孤独
つながればつながるほど
孤独になるのはなぜ?

きづらいと
る君に
寄りかかる
になっていく喜びの旅路へ

お知らせメールや各種SNS特設サイトやキャンペーンなどの情報を随時お届けします。

メール配信を申し込む

イエスはあなたの 痛みを理解してくださいます。

「この苦しみは誰にも分かってもらえない……。」そう感じるときがあります。しかし聖書は、私たちの痛みに共感してくださいまる主がおられると語ります。まことの神であられるにもかかわらず、まことの人となられたイエスは、私たちの経験をご自分のものかのように分かってくださいます。私たちがこの世界で葛藤するとき、「悲しみの人」イエスは慰めを与えてくださるのです。本書を通し、人間として生きられた救い主の愛の深さを知ることができますように。そして、その愛があなたの人生をどのように変えるかを理解できますように。

ビル・クラウダーは、20年以上の牧会経験を経て、デイリーブレッド社に加わりました。現在、コンテンツ部門の責任者として奉仕しています。デイリーブレッドの寄稿者やラジオ番組 Discover the Word のレギュラーを務めながら、世界各地で開かれる牧師や信徒リーダーのための聖会やセミナーで講師をしています。



Our Daily Bread
Ministries®



LW958